

本資料は、報道関係者を対象としています。医療現場や一般の方々を対象とした医学的な情報提供や、プロモーションが目的のものではありません。なお、これらの資料は配信時当初の情報が掲載されており、最新の情報が反映されているとは限らないことをご了承ください。

報道関係各位

2026 年 8 月 24 日

ヘルスケア業界に関心を持つ学生を対象に、サノフィが 言葉と文化の壁から医療の未来を考える夏休み特別授業を開催 ～外国人患者が医療現場で直面する課題を学び、 誰もが安心して医療を受けられる社会を目指す～

サノフィ株式会社(本社:東京都新宿区、以下「サノフィ」)は、サステナビリティ活動(CSR)の一環として、医療や薬などヘルスケア業界に関心を持つ高校生・大学生を対象に、夏休みの特別授業を開催いたしました。

本イベントは、通常業務の傍ら自ら有志で集まった従業員が運営・開催し、CSR ボランティアとして参加した従業員も含め約 60 名で、学生を迎えました。

5 回目の夏休み特別授業となる今年は、言語マイノリティの方が抱える医療におけるコミュニケーション上の課題に着目した特別授業を実施。

日本に暮らす外国人は年々増加しており、出入国在留管理庁によると、2025 年末時点の在留外国人数は 412 万 5,395 人と、前年末から 9.5%増加し、初めて 400 万人を超えました。*

こうした社会の変化を背景に、言語や文化の違いによるコミュニケーションの壁を乗り越え、誰もが適切な医療を受けられる環境づくりは、医療現場における重要な社会課題となっています。本イベントでは、講義やワークショップを通じて、参加者がこうした課題への理解を深め、将来ヘルスケアに関わる立場として何ができるかを考える機会を提供しました。

* 出典:出入国在留管理庁「令和 7 年末現在における在留外国人数について」



【開催概要】

- 名 称 : 医療の未来を考える 高校生・大学生サマープログラム
— 外国人患者の言葉と文化の課題。患者を支える仕事を学ぼう —
- 日 時 : 2026 年 8 月 21 日(金) 13:30～15:45
- 場 所 : サノフィ株式会社 東京オペラシティタワー

【開催プログラム】

実施内容	担当者
オープニング	サノフィ株式会社 社員
【AMC ご説明】 サノフィのAMCの取り組みについて	サノフィ株式会社 社員
【パネルディスカッション】 医療現場で起きているコミュニケーションに おける課題と、そのための工夫	<u>登壇パネリスト</u> サノフィ株式会社 外国籍社員 サノフィ株式会社 多言語資料制作担当者 医療×「やさしい日本語」研究会 武田 裕子氏 全国医療通訳者協会 NAMI 森田 直美氏 <u>ファシリテーター</u> サノフィ株式会社
【ワークショップ】 言語マイノリティの方々が、医療現場で直面する 言語の壁について理解を深める	医療×「やさしい日本語」研究会 武田 裕子氏 イ・ティンザ・キン氏
【ジョブアドベンチャー】 現役社員が研究開発から患者さんへの情報提供ま での幅広い業務を紹介し、医療を支える製薬企業の 役割について理解を深める	サノフィ株式会社 社員
クロージング	サノフィ株式会社 社員

誰もが安心して医療を受けられる社会へ — 医療における「信頼」について学ぶ

オープニングの挨拶に続いて行われたセッションでは、サノフィがグローバルで展開するイニシアティブ「A Million Conversations (AMC)」について紹介しました。AMC は、医療において十分な支援を受けにくいコミュニティとともに、医療への信頼を築き、よりインクルーシブな医療の実現を目指す取り組みです。セッションでは、さまざまな背景を持つ人々の中には、医療現場でのネガティブな経験などを背景に、医療システムへの信頼が損なわれている人々がいることを紹介。こうした医療における「トラスト・ギャップ」について学び、誰もが安心して医療を受けられる社会を実現するために、多様な人々の声に耳を傾けることの重要性が伝えられました。

こうした医療における課題への理解を深めたうえで、生徒たちは今回の授業のテーマである「言語マイノリティである外国人患者が医療現場で直面する言葉と文化の壁」について考えるセッションへと進みました。

様々な観点から医療現場における外国人患者の困りごとを知り、医療の現場でできる工夫を考える。

続いて、医療×「やさしい日本語」研究会の武田 裕子氏、全国医療通訳者協会 NAMI の森田 直美氏をお招きし、サノフィの外国籍社員、多言語患者向け資材制作を担当する社員が登場。それぞれ異なる側面で医療現場における課題や施されている工夫について、パネルディスカッションを行いました。

まず、医療×「やさしい日本語」研究会の武田氏は、日本語を母語としない患者が感じる「言葉の壁」について、受付から診察、会計、薬の受け取りまで、医療機関を受診するあらゆる場面で生じる可能性があることを説明しました。「病院では緊張から、普段は理解できる言葉でも聞き取れなかったり、言いたいことが言えなくなったりすることがあります」と話し、「ズキズキ」「ピリピリ」といった日本語特有のオノマトペも、症状を伝える際の難しさにつながると紹介。そのために、難しい言葉を言い換えるなど、相手に配慮したわかりやすい「やさしい日本語」を使うことが大事だと伝えました。



武田氏の話を受け、サノフィの外国籍社員も、「日常会話ではそれほど困ることはないのですが、病院や健康診断などに行くと意外なところで言葉の壁を感じることがあります」と、自身の経験を振り返りました。例えば、医療者が患者に配慮して普段とは異なる丁寧な話し方をすることで、かえって聞き取りづらくなることもあるといいます。「外国人だからと特別な話し方をするより、普段どおり自然に話していただく方が理解しやすいと感じています」と話し、武田氏が指摘した医療現場ならではの「言葉の壁」に共感を示しました。



続いて、全国医療通訳者協会 NAMI の森田氏は、言葉だけでなく、文化や生活習慣の違いが医療者と患者の認識のずれにつながるケースを紹介。1歳6か月児健診で「スプーンを使って食べない」という回答から子どもの発達上の問題が疑われたものの、詳しく確認すると、家庭に手で食事をする習慣があり、スプーンを使う機会が少なかったことが分かったといいます。「自分たちにとっての『普通』や『当たり前』を、すべての患者さんや家族に当てはめないことが大切です」と語り、「普段はどのようにしていますか」と一人ひとりに確認する姿勢の重要性を伝えました。



また、サノフィで多言語の患者向け資材制作を担当する社員は、患者の多国籍化に伴い、一部製品では日本語に加えて英語、韓国語、中国語、ポルトガル語の説明用冊子を用意していることを紹介しました。一方で、必要とされる言語は多岐にわたり、すべてに対応することの難しさにも言及。その上で、国籍にかかわらず患者さんに届けるべき情報は同じであるという考えから、日本語版と同じ情報を翻訳して提供するとともに、図表を多く取り入れるなど、言葉や文化的背景の違いにも配慮しながら、患者さんにとって分かりやすく、医療従事者も活用しやすい資材づくりを心がけていると説明しました。



「やさしい日本語」のワークショップを通じて、理解を深める

外国人患者の医療現場での課題を学んだあとは、医療×「やさしい日本語」研究会の武田 裕子氏とイ・ティンザ・キン氏によるワークショップが行われました。

「やさしい日本語」とは何かのレクチャーを受けた後、実際の医療現場でのコミュニケーションを想定したシナリオをもとにやさしい日本語への変換に挑戦。参加者からは「具体的な症状の伝え方の難しさを感じた。」「自分が難しいと思っていた言葉と、実際に外国人患者が理解しづらいと感じる言葉には違いがあることに気づいた。」などの感想が発表されました。そして武田氏、イ氏より「文章をシンプルにし、です・ます調で伝えること」や「ジェスチャーを交えること」に加え、相手の名前を呼んだり、相手の言語に合わせて挨拶したりするなど、緊張を和らげるコミュニケーションも重要であることなどのフィードバックを受け、「やさしい日本語」の理解を深める時間になりました。



製薬企業の多様な仕事を知る — 社員との対話を通じて、ヘルスケア業界でのキャリアを考える機会に

その後、参加学生たちはいくつかのグループに分かれ、製薬企業の多様な職種を知る「ジョブアドベンチャー」を実施。有志の社員によって企画・運営された本セッションでは、研究開発、メディカル、マーケティング、営業の各領域で働く社員が、CSR ボランティアとしてブースを設置し、生徒たちはそれぞれのブースを順番に回りながら、企業で働く社員と直接対話を重ねました。社員は自身のキャリアの歩みや現在の仕事内容、学生時代にどのような専攻をしていたのか、今その学びがどのように業務に活かしているかを紹介しました。研究開発からメディカル、マーケティング、営業まで、それぞれ異なる立場から患者さんや医療にどのように関わっているのかを伝えました。

生徒たちは、製薬企業のさまざまな職種で働く社員たちの話に耳を傾け、ヘルスケア業界には多様なキャリアの入り口があることに驚きと関心を示していました。また、「医療＝病院勤務」という一般的なイメージにとらわれることなく、製薬企業という立場からも人々の健康に貢献できるという新たな視点に触れ、ヘルスケア業界への理解を一層深める時間となりました。



高校生・大学生たちにとって、さまざまな立場からヘルスケア業界に携わる方々の話を通じて、固定観念にとらわれず自分らしい将来の選択肢を考えるとともに、外国人患者が医療現場で直面する言葉や文化の壁など、その背景にある社会課題への理解を深め、自分たちにできることを考える機会となりました。

AMCについて

「A Million Conversations」は、サノフィが実施している世界的な取り組みで、ヘルスケアシステムをよりインクルーシブなものへと変革することを目的としています。特に、歴史的に支援が十分に受けられなかった人々 — 女性、障がい者、LGBTQ+、少数民族の人々など — を対象としています。こうした人々は、過去の医療に関する否定的な経験により、医療への信頼度が他の人々に比べて低い傾向があります。[（ヘルスケアにおけるトラスト・ギャップに関する報告書）](#)私たちは、誰もが公平にヘルスケアにアクセスし、必要な医療を受けられる世界を構築することを決意しています。具体的な取り組み内容は下記の通りです ①マイノリティの人々との対話型イベントの実施 ②対話をもとにした今後の改善策の検討・提言 ③多様な属性の人々がヘルスケア産業に参画することを促す「サノフィ次世代奨学金」の実施 取り組みの詳細については、[A Million Conversations – Sanofi in Japan](#) をご参照ください。

サノフィジャパン・グループにおけるサステナビリティ活動について

長年にわたり社会への取り組み（CSR）を行ってきたサノフィは、現在、「健康」と「環境」を重点に据え、ビジネスと一体化させたサステナビリティ戦略に取り組んでいます。

2024 年には、中高生向けの夏休み特別授業と患児へのサポートのためのレクチャープログラムについて、東京ボランティア・市民活動センター主催の[第10回企業ボランティア・アワードで「大賞」を受賞](#)しました。

社会課題の解決に向けて、持続可能なインパクトをもたらすことを目指し、社員一人ひとりが自主性を持って活動しています。また、サステナビリティ活動は、社員が新たな知見や経験を得る機会となり、各人の成長や豊かな企業文化の醸成につながると考えています。

医療×「やさしい日本語」研究会について

「やさしい日本語」とは、相手にあわせてわかりやすく伝える日本語のことです。日本語を母語としない在住外国人への情報伝達に役立つとして防災・減災の分野で用いられています。しかし、医療者にはまだほとんど知られていません。「やさしい日本語」は、聴こえや理解に困難を抱える高齢者や障がい者とのコミュニケーションにも役立ちます。医療×「やさしい日本語」研究会は、「やさしい日本語」の医療者への普及、医療機関への導入を目指して活動しています。外国人支援、日本語教育学、ヘルス・コミュニケーション学、医学教育学それぞれの領域の専門家が外国人当事者と共に活動しています(<https://easy-japanese.info/>)。

全国医療通訳者協会 NAMI について

言葉をつなぎ、患者を支える専門職—医療通訳者—

一般社団法人全国医療通訳者協会（NAMI）は、言葉の壁を越え、誰もが安心して医療を受けられる社会を目指す医療通訳者の職能団体です。医療通訳者の育成・研修、調査研究、関係機関との連携を通じて、医療通訳の普及と専門職化に取り組んでいます。

サノフィについて

サノフィは、研究開発型の AI を活用したバイオ医薬品企業であり、人々の暮らしをより良くし、力強い成長をもたらすことに尽力しています。免疫科学領域の深い知見を活かし、世界中の何百万人もの人々の治療と予防を行う医薬品やワクチンを提供し、さらなる貢献のために革新的なパイプラインの構築にも注力しています。「人々の暮らしをより良くするため、科学のもたらす奇跡を追求する」という使命のもと、医療・環境・社会が抱える課題に真摯に向き合い、社員と国や地域社会にとって前向きな変化を生み出すことを目指しています。

日本法人であるサノフィ株式会社の詳細は、<http://www.sanofi.co.jp> をご参照ください。